



愛川ふれあいの村 今月の風景

# 2019年5月 自然のたより

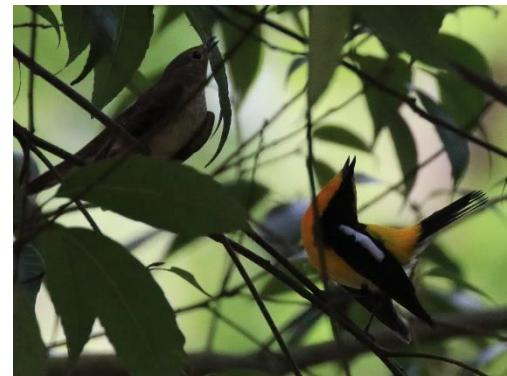
山からはツツドリの声が聞こえ、夜になるとアオバズクが鳴きます。昼と夜の気温差が激しく、半袖か長袖で迷ってしまいます。冬鳥も旅立つかどうか、植物も出るかどうか迷ってしまったことでしょう。夏鳥の求愛が見られ、巣立ったばかりの若い鳥も見様見真似でイモムシを捕らえていました。今まで見つかっていなかったのですが、新たな仲間としてキンランが加わり、村の自然を美しく彩っていました。(石川)



キンラン (菌類と共生)



ウスバアゲハ



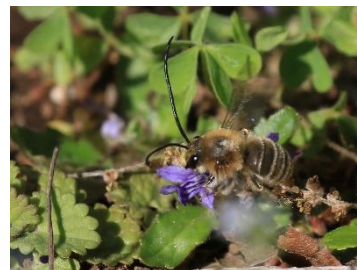
キビタキの求愛



タツナミソウ



エビネ



ニッポンヒゲナガハナバチ



カヤラン (着生)



ハナイカダ (雄花)



ヒナの糞を運ぶヤマガラ



サンショウクイのカップル



ヤマツツジ



タニウツギ



フタリシズカ



カマツカ



ギソウヨリ (菌類と共生)

## トピックス ★多彩な魅力★

4月から5月にかけての暖かな日差しが春の心地よさを感じさせてくれます。ゆっくりと休憩したいときは、藤棚の下にベンチがあります。

藤の青みがかった淡い紫の花房を見ているとなぜか落ち着きます。この花の名前から取られている『藤色』にはピンク色が持つ優しさや、水色が持つ癒しの要素などを含まれていることからカラーセラピーに取り入れられています。

また、藤は目以外にも舌で楽しむことが出来るのです。大きい品種だと1鉢を超すこともある花房、その1枚1枚の花弁は甘酢漬けにしてサラダに彩りを添えます。砂糖漬けは紅茶などに程よい甘みや香りを加えます。

藤の魅力はつるにもあります。つるが右巻きであれば『藤』、左巻きであれば『山藤』と見分けがつかれます。つるは強く、ねばりがあり籠を作る材料として使用されます。

見るだけではなく、私たちの身の回りでも活躍していると思うと、より身近な存在として感じられますね。(鎌形)



## 生き物 ★春キノコの代表★

キノコといえば、紅葉の季節に山奥へと分け入って探すイメージですが、ふれあいの村では春に『アミガサダケ』を見ることが出来ます。

主にサクラやモミ、トウヒなどの木の傍らに群生するため、グラウンドや第1ファイヤー場周辺で見ることが出来ます。

欧米では高級食材として珍重されています。アメリカのミネソタ州などでは『州のキノコ』として認定されています。

ふれあいの村ではよく出ますが、国によっては高級なキノコ。ぜひ、探してみてください。(大田)

※村のキノコは採取禁止です。また、生食は毒です。



## 旬 ★ミズ★

ウワバミソウって聞いたことありますか。タイトルと名前が違いますが、両方同じ植物です。山菜名や方言でミズナやミズといい、標準和名がウワバミソウ。溪流や水の滴る岩場に多く、環境がいいと50cmにもなります。村にはそういう環境がなく、大きくても20cm程度。5月はちょうど花の時期ですが、この植物を知らないと見過ごしてしまいそうです。味は格別でおひたし、炒め物、天ぷらなどにして食べます。オクラと同じネバネバ成分のムチンが入っており、免疫力を高め、疲労回復効果も期待できます。機会があればぜひ食べてみてください。(石川)



来月の見どころ

大きく育てアワブキ(泡吹)

愛川ふれあいの村では多くの種類の蝶が見られるが、その存在は村の中だけでなく、周辺の環境にも大きく影響を受けている。蝶にとっては人間の引いた境界線は意味をなさないので、それも当然だ。

このところ、夏が近づくと姿をあらわすスミナガシやアオバセリを、村の中であまり見かけなくなってしまう。濃い緑色の羽に淡い白い筋の墨を流したように見える模様のスミナガシに、青緑色の羽が美しく動きの早いアオバセリ。いずれもとても美しい蝶だ。

見かけなくなったのは、村の近くに生えていたアワブキの木がなくなったことが影響している可能性がある。アワブキはこれらの蝶の幼虫のエサとなる食草のひとつだ。それがなくなったことで、蝶の数が減ってしまったのかもしれない。

しかし、近くを歩いていると、まだ若く、細いアワブキの木を見つけた。今年はこの木を食草としたスミナガシやアオバセリが村の中で見られるかもしれないと、淡い期待を抱いている。そして、このアワブキの木が大きく育ち、たくさんの生命を育んでほしいと願う。

(吉田)

